

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号： 14501
 研究種目： 若手研究(B)
 研究期間： 2010～2012
 課題番号： 22720061
 研究課題名（和文）
 ファッション文化史から見る「お針子」の表象—19世紀アメリカを中心に
 研究課題名（英文） The Representation of the Seamstress in Fashion History with a Focus on 19th Century America
 研究代表者
 平芳裕子（HIRAYOSHI HIROKO）
 神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授
 研究者番号： 50362752

研究成果の概要（和文）：

19世紀アメリカを中心とするお針子の表象を考察することによって、以下の点を明らかにした。紡績・織布産業の機械化が進む1840年代、英米の諸メディアに頻出したお針子像は、歴史的に布地に与えられてきた女性性の象徴を繋ぎ止めようとする社会的欲望を表していた。またお針子像の衰退とともに登場する裁縫記事は、読者を「縫い、着飾り、視る」女性として育成した。お針子を含めた「縫う女性」の表象は、19世紀アメリカにおけるファッション文化と女性の結びつきの変容過程を示す記号として機能していた。

研究成果の概要（英文）：

In my research on the representation of the seamstress in American and British society of the 19th century, I came to the following conclusions. First, during the 1840s, an era which saw the mechanization of spinning and other developments in the textile industry, the seamstress should be seen as a symbol of social desire that formed a connection between femininity and fabric. Second, the emergence of magazine articles on home sewing and the decline of the seamstress encouraged female readers to adopt customs such as "sewing, dressing, and observing themselves." Thus, the representation of sewing women, including seamstresses, symbolizes the changing relationship between women and fashion culture in 19th America.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論、ファッション、アメリカ、19世紀、お針子

1. 研究開始当初の背景

本研究は、筆者の先の研究課題「『ゴード

イズ・レディズ・ブック』における良き女性とファッションの表象」（平成18-21年度科学研究費若手研究(B)）における研究成果を

引き継ぎ、発展させたものである。先の研究課題では、19世紀前半のアメリカの流行文化の普及において中心的な役割を担った女性誌『ゴードイズ・レディズ・ブック (Godey's Lady's Book)』を対象として、ファッション雑誌登場以前の時代のアメリカにおいて、「ファッション」がいかに関女性誌のテーマとして確立させられたのか、そのプロセスを明らかにした。しかしその後の課題として残されたのは、アメリカに流行文化が定着する19世紀半ば、衣服・ファッション産業の機械化の時代において、雑誌に見られる女性像の目まぐるしい変容をいかに解釈するかという問題であった。その際、特徴的な図像として抽出されたのが「お針子」であり、それに伴う「型紙」や「ミシン」の表象であった。そこで『ゴードイズ・レディズ・ブック』のみならず、他メディア（新聞・雑誌など）や諸芸術（絵画・文学・詩など）に表象された「お針子」像を調査し、流行文化の受容とファッション産業の発展という文化史的・社会史的な文脈においてそれらを読み解くことによって、近代における「ファッションと女性」の関係を考察することを、本研究の課題として着想するに至った。

2. 研究の目的

19世紀西洋の流行文化のもとに急増したお針子たち。この「お針子」に関する研究は、これまで労働史的観点から女性の就労状況の実態に関する社会学的調査が、また文学史的観点から主に感傷小説に登場する「お針子」像の解釈が行われてきた。ところが同時代の新聞や雑誌などにおいても「お針子」はさかんに言説化・視覚化されたにもかかわらず、従来の研究の多くは作家や作品の分析を通じた社会問題の提起に留まっており、「お針子」像そのものを主題とするものは数少ない。しかし「お針子」が19世紀に興隆した流行文化の影響下に急激な需要の高まりを見せた職業であったことを考慮するならば、流行文化の受容とファッション産業の機械化という歴史的な文脈に照らし合わせ、表象としての「お針子」に与えられた文化的・社会的意味の変遷を考察する必要があると考えられる。

そこで本研究は、近代社会におけるファッション文化の成立と発展の歴史から「お針子」にアプローチし、とりわけ19世紀アメリカを中心とする「お針子」の表象の歴史の変遷を明らかにすることによって、「縫い、着飾り、視る」といった衣服をめぐる女性たちの経験がいかに変容し、ファッションへの欲望がいかに構築されたのか、そのプロセスを考察するものである。その際、とりわけ次の4つの段階的視点から研究を進める。すな

わち、

(1) 19世紀前半のアメリカにおいて「ファッション」はいかに価値を与えられたのか。

(2) 産業革命を迎えたイギリスにおける「お針子」像の特徴と展開、そしてそれらがアメリカのメディアに与えた影響はいかなるものであったのか。

(3) 衣服産業の発展とともに、アメリカの女性誌において「お針子」はいかに視覚化・言説化されるようになったのか。

(4) 雑誌に表象される「お針子」像と流行情報を通して、女性は「ファッション」との関わりをどのように変容させていったのか。

以上の観点から考察を進めることによって、ファッション文化史からみる「お針子」の表象の歴史的展開とその文化的・社会的意味を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

縫い物をする女性の姿は古くから描写されてきた。しかし19世紀半ば、それまで社会的注目を浴びることのなかった「お針子」が、あらゆるメディアにおいて頻繁に視覚化・言説化されるようになる。本研究は、産業革命をいち早く迎えたイギリスの状況を踏まえ、既製服産業を高度に発達させたアメリカを主たる対象として、「お針子」像の出現から衰退までの歴史を明らかにする。ゆえに研究の遂行において要となるのは、1840年代から1860年代までの両国の「お針子」にまつわる言説やイメージを掲載した文献資料の調査と収集である。

一次資料としては、19世紀アメリカおよびイギリスにおける文学・新聞・雑誌・政府報告書・統計資料などの調査と収集を行う。文学作品については19世紀半ばの英米の作家による小説やエッセイ、たとえばチャールズ・ディケンズやエドガー・アラン・ポーなどの有名作家をはじめとして、雑誌に執筆していた当時の人気作家（T・S・アーサー等）の作品を調査、収集、読解する。

そして19世紀の新聞、政府報告書、統計資料については、原本や再版書籍の調査だけではなく、データベースや電子書籍の調査を行い活用する。雑誌については、19世紀半ばのイギリスの雑誌（『パンチ (Punch)』、『イリュミネイテッド・マガジン (The Illuminated Magazine)』など）やアメリカの女性誌（『ゴードイズ・レディズ・ブック (Godey's Lady's Book)』など）について原本調査を実施すると同時に、マイクロフィルム資料も最大限に活用して資料の収集を行う。

ことに同時代のアメリカで希少な「お針子」像を掲載した『ゴードイズ・レディズ・ブック』については、創刊から 1860 年代までを通覧し、ファッションや衣服制作に関わる特集記事、ファッション・プレートや版画などの調査と収集を行う。

また一次資料の文献調査と平行し、19 世紀イギリスやアメリカに関する文化史、社会史、また同時代の服飾史、ファッション研究に関する学位論文、研究論文、学術書籍、一般書籍等の二次資料の調査と収集を行う。

先行研究における問題点と議論をふまえた上で、上記の研究目的で示した四つの視点から、「お針子」の表象の歴史的展開とその文化的・社会的意味の変容について調査と考察を進める。

4. 研究成果

(1) 主な成果

19 世紀前半における衣服産業の発展と流行文化の形成の時代に、英米の諸メディアにおいて「お針子」像が登場する。お針子像は 1840 年代に出現し、頻繁に描写されたのち、1850 年代後半には姿を消す。「お針子」登場の文化的背景、お針子像の出現から衰退までの歴史、ならびに「お針子」をとりまく言説やイメージの考察を通じて得られた成果は、下記の四編の研究論文としてまとめられた。各研究論文の研究全体における位置づけ、ならびに各論文の要旨は以下の通りである。

① 「19 世紀アメリカにおける女性と装飾—『ゴードイズ・レディズ・ブック』を通じての考察」

研究全体における本論文の位置づけ：「お針子」像出現の背景にあるアメリカのファッション文化の形成について、とりわけ女性誌において「ファッション」が家庭装飾とともに「女性の仕事」として正当化されていくプロセスを考察する。

論文要旨：19 世紀アメリカの代表的女性誌『ゴードイズ・レディズ・ブック』における、とりわけ 1830 年代から 50 年代初頭の言説とイメージの分析を通じて、家庭装飾の推進とともにファッションが正当化され、自他を飾る行為が女性の仕事として意味付けられていくプロセスを考察する。同誌は創刊当初よりヨーロッパの最新流行に対して「フィラデルフィア・ファッション」を提案し、女性のこころを表現するものとしての控えめな装いを奨励した。また女性が自身の体を飾るように、手作り装飾品を制作して室内を飾り付けることを奨励した。さらに「コテージ・モデル」と題した連載を開始し、理想的な住ま

いのあり方を提示しながら、家族とともにある理想的女性像を再現した。「飾る」とは、家を中心に存在する女性が空間を私化し、女性の領域を拡張してゆく行為であり、外の社会に対して内なる快適な家庭を作る試みであると見なされた。このように 19 世紀アメリカの女性誌において、ファッションは家庭装飾とともに女性の「自他」を飾る仕事として強力に推進されたと言える。

② 「19 世紀半ばのイギリスにおける「お針子」の表象」

研究全体における本論文の位置づけ：産業革命をいち早く迎えたイギリスの諸メディアにおける「お針子」像の特徴と展開を明らかにすることによって、アメリカのメディアにおける「お針子」像の出現に対する影響関係を考察する。

論文要旨：本論は、19 世紀半ばのイギリス、とりわけ 1840 年代のロンドンを中心にさまざまなメディアに登場した「お針子」の表象について考察するものである。研究を通じて次のことが明らかとなった。まず雑誌においては、貧しいお針子が憔悴した姿で、時に骸骨姿に代えて描かれた。それらはファッションに興じる裕福な男女の図像と対比的に示されることによって、ますますその悲惨さが強調された。次に政府による児童雇用委員会の報告書においては、お針子の過酷な労働環境と低賃金、健康被害が明らかにされた。ところが絵画や小説をしてみるならば、お針子がただ下層階級の携わる厳しい労働としてのみ描かれていたわけではないことが明らかとなる。レッドグレイヴを始めとするヴィクトリア朝時代の画家は、産業革命の進行する社会において「内なる家庭」に留まり「裁縫」に携わる「お針子」を主題として描いた。糸紡ぎや機織りが機械化された時代に、「裁縫」における「女性の仕事」としての側面が強調される。鑑賞者たちは、「お針子」の表象を別世界の出来事ではなく、同じ世界の現実の視覚化として強く意識することになった。こうしてそれまで「刺繍」に限定されていた「趣味」としての針仕事は、1850 年代にミシンが登場すると「裁縫」にまで広げられてゆくことになったと考えられる。

③ 「縫う女性」の表象—『ゴードイズ・レディズ・ブック』を手がかりに」

研究全体における本論文の位置づけ：19 世紀アメリカの代表的女性誌に掲載された「お針子」像の出現と衰退のプロセスを明らかにすることによって、衣服制作をめぐる女性の経験がいかに変容したのかを考察する。

論文要旨：本論は、『ゴードイズ・レディズ・ブック』に掲載された女性像、「縫う女性」の諸特徴と歴史的展開、その文化的意味を考察するものである。同誌はヨーロッパの流行や作法を取り上げ人気を博すが、1840年代後半から疲弊したお針子の姿が頻繁に掲載され始め、1850年代前半には姿を消す。「縫う女性」は何故登場し、五年余りに渡って頻繁に描かれたのだろうか。1840年代とは、織機の改良と紡績機の発明を経て、布地は大量に生産されるがミシンの実用化には至らぬ時代であり、ヨーロッパではお針子の過酷な労働が社会問題化した。同誌はレディの趣味としての装飾的な「刺繍」を取り上げても、同じ針仕事である実用的な「裁縫」を掲載したことはなかった。しかし国土の拡大と都市の発展に伴う読者数の増大と雑誌の大衆化を背景として、家庭で行われる「裁縫」、すなわち衣服の制作とそれに伴う内職が、織布工場での下層階級の労働と差別化される。「縫う女性」とは、産業革命による織布産業の発達により消えた「紡ぐ女性」や「織る女性」に替わる女性性の新たな象徴として機能する。ミシンや型紙の登場により衣服生産の全てが機械化されるとともに誌面から姿を消す「縫う女性」は、アメリカ社会における女性を巡る労働と家事の境界の揺らぎを示すと同時に、女性が「家庭」にどのように縫い込まれているかを視覚化しているのである。

④「女工、お針子、家庭裁縫—19世紀アメリカのファッション文化における女性」

研究全体における本論文の位置づけ：産業革命による紡織産業の機械化により、布地・衣服制作に関わる女性たちの習慣がいかに変化し、近代のファッション文化を形成するに至ったのか、そのプロセスを考察する。

論文要旨：本論は、19世紀前半のアメリカにおいて、布地の扱いをめぐる女性の習慣がいかに変化したのかを考察するものである。歴史を通じて布作りは女性の仕事と見做されてきた。ところが産業革命による紡織産業の機械化は、それまで家事の中で大きな比重を占めていた糸紡ぎや機織りから女性を解放した。農村の余剰労働力となった女性たちは、機械を監視する工場労働者として、あるいは都市のお針子として賃金労働に従事した。ローウエルの女工たちは布地の生産に携わると同時に、余暇には服飾品を購入し、消費者としても育成された。一方でお針子は、紡績・織布の機械化により次々と生産される布地を、ミシンの実用化前の時代において、過酷な労働環境と低賃金に耐えながら衣服に仕立てた。しかしながら下層階級だけでなく、家庭との結びつきを象徴する針仕事には

様々な境遇の女性たちが従事した。そして都市経済の発展とともに増大した中流階級は、女性誌に掲載され始めた裁縫記事を頼りとしながら、家庭裁縫に流行のスタイルを取り入れていった。このようにあらゆる階級の女性たちが、布地や衣服を取り巻く習慣を大きく変えながら、流行文化の形成に加担していった。19世紀前半のアメリカ女性たちの衣服をめぐる経験は、様々な国々で近代化の通過点に生きた女性たちの経験の変容を縮図として示していると言える。

以上、四編の研究論文において、19世紀アメリカを中心とするお針子を含めた「縫う女性」の表象の変遷が指し示すものについて考察を行った。これらの研究を通じて明らかとなったのは、このような「縫う女性」の表象が、19世紀アメリカにおけるファッション文化と女性の結びつきの変容過程を示す記号として機能してきたということである。つまり、女性たちは、これまでの歴史を通じて構築された「女性の仕事」としての布地・衣服制作から引き剥がされつつも、紡織・衣服産業の機械化の時代において「縫い、着飾り、視る」という新たな振舞いを体得し、近代のファッション文化の生成に加担させられていく、まさにその過程を「縫う女性」のイメージが指し示してきたということである。さまざまなメディアの表象として立ち表れる女性たちの経験的変容が近代ファッションの推進力となり、ファッションを「女性的なもの」と見なす近代的視線の生成をもたらしたのだと考えられる。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけ

本研究は、19世紀アメリカを中心とする「お針子」の表象を通じて、近代におけるファッションと女性の変容を明らかにした。従来、個別の学問分野（美術史・服飾史・文学・社会学）の研究対象として取り上げられてきた研究対象（絵画・文学・新聞・雑誌）を総合的に調査し、それまで女性の就労環境や社会的地位をリアリズム的視点から問題提起する素材にすぎなかった「お針子」を、ファッション文化史的な視点から読み直した。「お針子」という対象自体に着目し、「お針子」の表象の変遷とそれに伴う意味の変化を、19世紀のファッション産業やファッション文化の発展という社会・文化史的脈に置きながら解明した。本研究は、ファッションを同じく考察の対象としながらも、服飾様式を再構成する服飾史や、流行現象の伝播を調査する社会学においては看過されてきた主題に積極的にアプローチしたものであり、従来の学問領域を横断する表象文化研究の一端を担う研究と位置

づけられる。そしてその成果は、今日のファッション研究に新たな視座をもたらすものと期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 『縫う女性』の表象—『ゴードイズ・レディズ・ブック』を手がかりに— 平芳裕子、『美学』

査読有、242号、155~166頁

2013年

② 「19世紀アメリカにおける女性と装飾—『ゴードイズ・レディズ・ブック』を通じたの考察」 平芳裕子、『デザイン理論』

査読有、第56号、45~58頁

2011年

③ 「19世紀前半のイギリスにおける『お針子』の表象」 平芳裕子、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』

査読有、第5巻第1号、75~83頁

2011年

[学会発表] (計 1 件)

① 『縫う女性』の表象—『ゴードイズ・レディズ・ブック』を手がかりに— 平芳裕子 美学会全国大会口頭発表

於京都大学

2012年10月8日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平芳裕子 (HIRAYOSHI HIROKO)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：50362752